



思い合うということ

高富中学校1年 大石 陽奈心

「むかついたからやった。」
「誰でもいいから殺したかった。」

「こんなに大ごとになるとは思わなかった。」
このあまりにもひどい、無責任な言葉

が今日も私の心に突き刺さる。「誰でもいい?」「ムカついたのは分かるけど、そこまでする?」思わずテレビに向かって吐き捨てる私がいる。それと同時に、「もし、私がやられたら?」「そんな身勝手な理由で、私の大事な家族や友達が被害にあったら?」そう考えただけで胸が苦しくなった。

私は、ここ数年の間に、ものすごく身勝手な事件が増えているように感じている。殺人は殺人でも無差別的なもの。SNSによる誹謗中傷や迷惑行為。最近耳にするニュースは、「自分への欲望を満たすための行為」「自分のイライラを解消するための行為」が目立つ気がする。だからこそ、そういう事件を耳にすると腹が立つ。私は、「もっと周りのことを考えてよ。」「やられた身にもなつてよ。」と、いつもそう思いながら、事件を起こしている人々を非難していた。そんなある日のことだった。いつものようにニュースを見ていた母が、つぶやいた。「なんでこんなひさなことをしてしまう前に、誰かに相談できんかったんかねえ。一人でもいいから、誰かがその子の辛さに気づいてあげていたら、その子は救われたかもしれないのにねえ。」

目が点になった。加害者に対して怒っている私とは、正反対の言葉が聞こえてきた

からだ。そういえば、私は今まで、「加害者」悪いことをした人」としかとらえたことがなく、「なぜそんなことをしてしまったのか?」までは考えたことがなかったのだ。

それ以来、私は世の中で起きた事件に対して「なぜそれは起こったのか?」「どうしてその人はやってしまったのだろうか?」という視点からも考えてみるようになった。すると、自分の身勝手な思いだけでやってしまった人も、きつと苦しんでいたんだと思うようになってきた。悩んだり、ストレスがたまったりして、自分の気持ちを抑えきれなくなるのではないかと。そして、その気持ちを誰にも吐き出すことができず、限界がきて悲しい事件につながってしまうのではないかと。「周りのことを思う気持ち」をいつの間にか忘れてしまうのだと思う。

そう考えると、今の私のクラスには周りのことを思う気持ちがあると思う。私たち一年生は、四月の終わりに宿泊研修に行った。新しいクラスになって一か月もたっていないのに、仲良く協力して活動できるか少し不安だった。でもそんな不安は必要なかった。カレライス作りでは、困っていたら声をかけて一緒に作ったり、マイムマイムやジェンガの練習では、新しい友達同士で教えあったり、お互いを思い合ったりする姿がたくさんあった。ビンゴを完成させるオリエンタリングでは、ちょっとしたハプニングがあった。その日はものすごく暑くて、グループに体調不良の子が出てしまい、

他のグループより遅くなってしまったのだ。グループで時間内にポイントを競い合う活動なので、もしかしたらみんなの中にあせる気持ちもあったかもしれない。でも、私たちが優先したのは、体調不良の子への心配とお互いを思う気持ちだった。時間内には達成できなかったけれど、ゴールした時のみんなの顔は晴れ晴れとしていた。私もとても気持ちよかった。思い合えるとは、こんなに気持ちよく温かいんだと強く感じた。今の社会に必要なのは、きつとこの思いなんだと思う。

身勝手な自己主張や、SNS上だけの人間関係ではなく、お互いの気持ちを言葉で伝え合い、聞き合える環境を作り、周りの人が気づいて声をかけてあげる。そうならば、自分の欲望やイライラを消化するだけの悲しいニュースは少なくなると思う。

だから、私はまず、自分の周りから始めようと思う。元気がない子には「大丈夫?」と声をかけたり、みんなで協力して楽しむことができるように動いたり、クラスのみんなが明るく、温かくなる行動をしたい。そして、たくさんのコミュニケーションを通して深い信頼関係を作っていきたい。その小さな積み重ねが多くの人々の心を救う活動につながっていくと思うからだ。だから、私は今日もたくさんの人と話し、笑顔で過ごしていく。一人一人がお互いを思い合える社会を願って。

令和5年度 山県市少年の主張大会

市少年の主張大会で優秀賞に輝いた2人の生徒の作品を紹介します。



「心のマスク」を外して

高富中学校2年 夏目 梨央

皆さんは、自分の顔に自信を持っていますか。おそらく、「はい」と答える人は少ないのではないのでしょうか。では、少し質問を変えましょう。皆さんは自分の顔が好きですか。誤解されるのが怖くて、積極的には伝えてきませんでしたが、私の答えは「YES」です。私の目はみんなが憧れるようなぱっちりとした二重ではないし、流行りの涙袋もありません。おそこにはニキビもできて、自分の顔に自信が持てず、他の子と比べて落ちこむことももちろんあります。それでも、私は自分の顔が好きです。この一見矛盾したように思える二つの感情を、私は今までずっと持ち続けてきました。

新型コロナウイルスの位置づけが五類に引き下げられた今、マスクの着用については私たち個人の判断に任されています。世界では「脱マスク」の流れが進む中、日本では未だにマスクを着用する人が多く見られます。その理由としては、「感染の不安が残っているから」「みんながまだ外していないから」など様々ですが、女子小中高生を対象に行ったアンケートによると、「恥ずかしいから」「自分の顔に自信がないから」という回答が最も多い結果でした。私もその気持ちはよくわかります。

思春期を迎えた私たちは、容姿などを他の人と比べやすい傾向にあり、私の周りでも、「私はあの子みたいになんか可愛くない」「自分の顔は、コンプレックスの塊だから嫌い」などの声が、一日に何度も聞こえてきます。私はそれを耳にするたび、胸を締め付けられるような悲しく苦しい気持ちに襲われます。自分を人と比べるようになるのは、思春期に起こる発達として正常なものだと思いますが、今の私たちは必要以上に見たい目を気にしているように感じます。そしてその原因は、容姿を批判されて傷ついたり、社会の中で知らず知らずのうちに、誰かが決めた美しさの基準を押しつけられているからなのだと思います。例えば、私は自分の目が好きですが、「二重に整形して可愛くなるよ！」といったような広告を目にする時、私の奥二重と同時に「好きだ」という気持ちも否定されたような気がして、自信を持つてはいけない、好きではないのかもしれない、と思わされていたことに気づきました。そして、最初は感染症を防ぐために着用していたマスクが、批判から自分の心を守るためのに着ける「心の仮面」^{マスク}に変わっていたのだと思いました。

それでも、私が自分の顔が好きだと思えるのは、今まで様々な出来事に真摯に向き合い、泣いたり笑ったりしながら乗り越えてきた自分だけの顔だということに誇りに思っているから、そんな自分を家族や友達、先生などの周りの人が支え、私が私であることを肯定し、温かい言葉をかけてくれるからだだと思います。私は

自分の顔に自信がないと欲していたけれど、本当は「このままの私も好きだな」と思える、温かく柔らかな自信が私を包んでくれた周りの人に改めて感謝しました。美しさを求めて整形などを選ぶ人もいます。確かにになりたい姿になれるかもしれないけれど、私が求める美しさはメスや針を使わなくても手に入れられるものです。それは、心の優しさや知性の輝きなど、その人の内面が映し出す美しさなのです。

私の周りは、色とりどりの個性を持った美しい人で溢れています。その美しさに目を向けず、誰かに決められた同じ美しさを目指すのはとても勿体ないことだと私は思います。

「自分の顔が好きじゃない」。その気持ちは、すぐになくなる物ではないかもしれませんが、それでもその気持ちを消すくらい思いで、何度でも、私は伝え続けていきます。「あなたは本当に美しい」「私はあなたのが好きだ」。ありのままの自分を愛せるように。自分の姿に自信を持てるように。みんなが「心の仮面」^{マスク}を外して、日だまりのような笑顔で笑い合える、その日を信じて。